ISSN 1344-5561

京都府立大学図書館報

なからぎ

２３５号

２０２１年10月

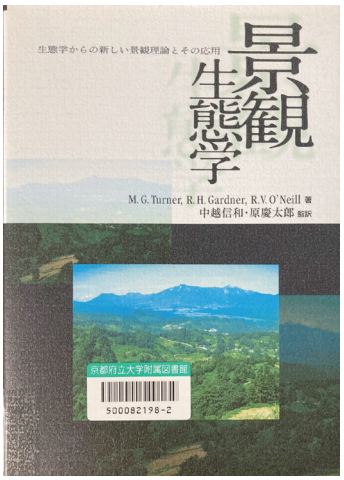
友人が開いた読書の扉

教務部長　長　島　啓　子

読書は物語・自伝であれば、主人公を通して自分と全く異なる体験にいざない、主人公とともに喜怒哀楽の感情を共有する。評論文などはある事柄に対する筆者の意見を通して、自分ならどう考えるだろうかと、思考を深める豊かな時間を提供する。

読書のこのような面白さを、人はいつ知るのであろうか。子供の成長にとって読書の重要性が再認識されるようになり、幼い頃から読み聞かせを行うこと、小学校・中学校では朝読書の時間が設けられるようになることも多くなったと感じる。振り返れば、自分は小学校までは全く読書に興味がなく、夏休みの読書感想文に苦しむことが多かった。それを変えたのは、中学の読書好きの友人であった。幅広いジャンルの本を読む友人の家は、部屋の壁の一面の上から下までが本棚。友人の家に行っては、面白いという本を借り、物語の中身についてワイワイ数人の友人と話をするうちに、いつの間にか自分の部屋の本棚も多くの本で埋め尽くされるようになっていった。

森林科学の道に進もうと思ったきっかけをくれたのも、本であった。1992年地球サミット（環境と開発に関する国際会議）がブラジルのリオデジャネイロで開催。「気候変動枠組条約」「生物多様性条約」への署名が開始されるとともに、「アジェンダ21」「森林原則声明」などが合意されたかつてないほどの地球環境問題を話し合う大規模な会議であった。地球で何が起こっていて、この会議で世界はどう対応しようとしているのか、地球サミットに関わる本を貪るように読んだものであった。中でも森林問題に興味を持ち、森林の問題に関わる仕事がしたいとの想いで、当時文系の学部に所属していたが、生態学に関わる専門書を読むようになり、専門分野を変更して森林科学の道に進んだ。



『景観生態学』
M.G.Turner, R.H.Gardner,
R.V.O' Neill 著、
文一総合出版、2004年
（請求記号 290.13 ‖ T）

今は専門書を中心に読む日々である。子育てと仕事の両立の中で、なかなかじっくり物語などを読む暇がなくなってしまった。しかし、子供が小さい頃は絵本の読み聞かせをし、大きくなれば面白い本を紹介して、子供と本の話をしてきた。そんな子供達も自分で面白い本を探しては、姉妹でワイワイと本の中身の情報交換をし、主人公に感情移入して涙し、豊かな読書の時間を満喫している。かつて、友人と話をしていた自分の姿と子供達の姿を重ねながら、私の読書の扉を開いてくれた友人に心から感謝をする日々である。

メメント・モリ

森林科学科　細　谷　隆　史

本稿の題目は、「死ぬを忘ることなかれ」というラテン語の警句である。いつ誰が言い出したとも知れないこの言葉は、現代でもたびたび言及される。この言葉の意図は「やがて来る自身の死を想い、今の生き方を見つめ直すこと」と解釈できよう。この意図に表立って異論を唱える人はあまりいないと思うが、何とも陰惨で、有無を言わせぬ雰囲気を持つこの言葉を聞いて、それを謙虚に実行する人は少ないだろう。だが、万人に平等に訪れる死について深く考えることは、よりよい生き方を見出す上で有意義そうである。本稿では、いくつかの本を紹介しながら死について考えてみたい。なお私は、正月に実家の仏壇に線香をあげた後、神社に初詣に行くような無宗教の人間であることを申し添えたい。

死とは普通あまり考えたくない事象だが、同時に一部の人の好奇心を掻き立ててきた。**『死にカタログ』**（大和書房）の著者である寄藤文平氏も、少なくとも私が思うにその一人である。この本では思わず顔がほころんでしまうイラストとともに、古今東西で死がどう捉えられてきたかがつづられている。死について考えたい時は、頭の中で「メメント・モリ」を100回唱えるより、この本を読むほうが有意義であろう。なかでも興味深いことの一つは、古代社会では、死は現代ほど忌み嫌われる事象ではなかったということである。これは、科学技術が未発達であった古代では、飢餓、病気、災害などによる死が、人々にとって身近な存在であったことが一因かもしれない。逆に考えると現代社会では、身近な死が存在しない分、死への恐怖が肥大化していると見なせるかもしれない。無知は恐怖を呼ぶのである。

ところで**『死にカタログ』**によると、現代日本人は病院で死ぬ可能性が最も高いようだ。その点で医療というものは、生命や健康という課題に取り組むことと同様、死についても真剣に取り組むべきといえる。ところが数十年前までの医療の世界では、死とは敗北を意味し、回復の見込みのない患者は医師から見放され半ば放置されるのが通例であった。そのような医療に疑問を持ち、現代でいうターミナルケアの概念を初めて打ち立てたエリザベス・キューブラー＝ロス（1926~2004）という人物がいる。氏の著書**『死ぬ瞬間ー死とその過程について』**（読売新聞社）は、現在の医学部における教育でもしばしば紹介される良書である。キューブラー＝ロス氏は、200人以上の末期患者への誠心誠意のケアを通して、末期患者の抱える心の問題に正面からアプローチした。その結果提唱された、死にゆく人間がたどる心理プロセス（否認、怒り、取引、抑うつ、受容）は、今でも病院や介護施設などにおける医療や介護従事者の間でしばしば引き合いに出されている。

キューブラー＝ロス氏は、何百人という人間を看取った、現代の先進国の社会ではまれな死を身近に感じていた人間であった。では氏の死生観はどのようなものだったのだろうか。興味深いことに、氏は多くの末期患者の死にゆく様と向き合う中で、魂の存在と死後生を確信するようになった。氏は、不治の病を抱えた子供達に対して、肉体を持った人間を蛹、死後自由になる魂を蝶に例えて、死を素晴らしいイベントとして説明していた。これは病める子供達を元気づけるための方便

などではなく、氏が心から信ずるところであったようだ。現代日本における知の巨人といわれた立花 隆（1940-2021）氏は、その著書『**臨死体験**』（文藝春秋）の中で、キューブラー＝ロス氏に直接インタビューした際、「あなたは死ぬことが楽しみか？」という質問に対して、キューブラー＝ロス氏が満面の笑みで「yes!」と答えたことを、圧倒的な臨場感でつづっている。ここで注目すべきは、キューブラー＝ロス氏は医師であり、事実に基づく判断と批判的なデータ分析といった、いわゆる理系の人間としての訓練を徹底的に受けた人物であったことである。高い理性的判断力を有する人間が、死後生や魂といった超科学的なことについて得心した過程とは、一体どのようなものだったのだろう。

精神科医であるアベン・アレクサンダー氏は、髄膜炎により数日間死線をさまよい、その際不思議な体験をした。いわゆる臨死体験というものだが、それをもとに氏は『**プルーフ・オブ・ヘヴン**』（早川書房）を著している。氏は自身の臨死体験と生還後に見たカルテの内容を照合し、大脳が完全に機能を停止しても、人間が日常よりむしろ鮮明でリアルな意識的体験をし得ることは疑いようのない事実であると結論している。それと同時に、脳とは別の意識中枢（＝魂）の存在と、死後生の実在を強調し、体験前に自身が抱いていた唯物的世界観を否定するに至っている。上のキューブラー＝ロス氏も、受け持つ患者から類似した体験（実は自分自身も臨死体験者という話だが）を繰り返し耳にしながら、自身の死生観を変化させたようである。

もちろん臨死体験は、末期の脳が見せる一種の夢として解釈されることの方がむしろ多い。上の『**臨死体験**』の著者である立花氏は、臨死体験が現代科学の諸理論で説明不能な現象を含むことを認めつつも、あくまでも脳内における主観的現象との立場を取っていた。とどのつまり、自身が死んでみないと究極的な答えは出ないというわけである。ただそれとは別に、上の三名は死を恐れるのをやめ、むしろ楽しみにするようになったという点は強調されるべきである。つまり三名とも、それぞれ別の形ではあるが、死と真摯に向き合うことで死への恐怖を克服したのである。本稿の読者の皆さんも、ぜひ重い腰を上げて死について色々考えてみて欲しい。より良く生きるためのアイデアが浮かぶはずである。

魂の存在についての個人的な意見を述べると、私はキューブラー＝ロス氏、アレクサンダー氏の側の人間である。つまり魂と死後の世界の存在を信じている、というより、臨死体験などの不思議な現象を、知性と理性を駆使して解決すべき科学の課題としてとらえた場合、それらに対する唯一の合理的な説明は、魂と死後生の存在を認めることであると考えている。この考えを前提に「この世」を見つめるとどうだろう。物的財産を蓄えるためだけに躍起になるのは意味があるだろうか。あの世にお金を持っていけないことは想像に難くない。一方、観察し、思考し、決断し、内省し、学習する主体としての意識が、脳でなく魂にあるのなら、この世での辛苦や困難を通し、自ら培ってきた人格や知性はあの世に持って行けそうである。この世限りのものと、次なる未知の世界に持ち越せるもの、より重要なのはどちらだろう。死について真面目に考えることは、よい生き方を考えることと同じくらい重要である。これらは同じ棒の両端であり、生き方を水平に保つうえで不可欠なものでなかろうか。

『死ぬ瞬間
― 死とその過程について』
E・キューブラー・ロス 著、
鈴木晶 訳、1998年
（請求記号 146.1 ‖ K）

自宅やスマホ等

学外からの電子リソースの利用のしかた

これまで図書館や大学の学内 LAN に接続されたパソコンからしか閲覧ができなかった電子ジャーナルや電子ブック、データベースが、自宅や外出先のパソコン・スマホ等からもアクセスできるようになりました。

オンライン授業が増えた今では欠かせないものとして、学外のどこからでも学習や研究に役立つコンテンツを活用できるよう、その利用方法について紹介します。

●対象者

全学認証 ID をお持ちの府大の学生・教職員

●利用できる契約コンテンツ

	タ　イ　ト　ル	内　　容
新聞	聞蔵Ⅱビジュアル朝日新聞記事データベース　（通称：きくぞう）	朝日新聞、週刊朝日、AERA、現代用語や人物の検索データベースなど
	ヨミダス歴史館	読売新聞オンラインデータベース
データベース	ACS (American Chemical Society)	1996年からのアメリカ化学会発行の電子ジャーナル64誌
	EBSCOhost Academic Search Elite	人文・社会・自然科学、医療、デザイン、コンピュータ等、幅広い分野の学術雑誌
	JapanKnowledge Lib	国内最大級の辞書・事典データベース「日本歴史地名大系」、「国史大辞典」、「群書類従（正・続・続々）も利用可
	Nature.com	1869年からの自然科学系雑誌「Nature」
	PNAS（proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America）	生物科学・物理科学・社会科学系分野に及ぶ全米科学アカデミーの議事録を収載した雑誌
	Science	自然科学系科学雑誌「Science」
	SpringerLink	約1,900タイトルの電子ジャーナル
	Westlaw Japan	日本の法令・判例等
	Westlaw Next	アメリカ法を中心とした英米の法令・判例等
電子ブック	Maruzen eBook Library	学術機関向け和書の電子ブック
	EBSCOhost eBook Collection	EBSCOhost のプラットフォームから利用できる、和書・洋書の電子ブック
	KinoDen	学術機関向け和書の電子ブック
	SpringerLink	約3,000以上タイトルの洋書の電子ブック

●利用方法

1.京都府立大学附属図書館ホームページトップの上部中央の「データベース」タブより、上記契約コンテンツの一覧を表示。

2.利用したいタイトルをクリックし、全学認証ログイン画面にてユーザ名／パスワードを入力しログイン。（ユーザ名／パスワードはキャンパス Web や情報処理室の PC と共通）

3.読みたい電子ジャーナルや電子ブックを検索し閲覧。

●マーク説明

Remote　左頁の利用方法のとおり全学認証で OK

学認　学認経由で京都府立大学を選択後、全学認証（以下参照）

◎ JapanKnowledge の場合：「学術認証（シボレス）でのご利用はこちら」をクリック

◎ Maruzen eBook Library の場合：「学認アカウントをお持ちの方はこちら」をクリック

◎ KinoDen の場合：「学認でサインイン」をクリック

●利用上の注意事項

①大量ダウンロードは厳禁です。

②電子ジャーナル記事の閲覧・ファイルのダウンロード、プリントアウトは、個人の調査・研究・非商業的な利用の範囲となっています。

③不正使用が判明すれば全学利用不可となりますので、著作権等も守って頂き、公正な利用をお願いします。

※相談カウンターでは、ほかにも学習・研究活動のサポートのための様々な相談を承っています。お気軽にご相談ください。

○秋の企画展示　～読書の秋！文学賞受賞作品を読もう～

夏休みも終わり、少しずつ秋の気配が感じられるようになってきました。秋といえば「読書の秋」です。図書館では、「読書の秋！文学賞受賞作品を読もう」をテーマに、文学賞の中でも特に注目度の高い芥川賞および直木賞の受賞作品を集め、過去10年分を振り返る企画展示を行っています。

静かな秋の夜長を過ごすのに、読み逃している作品をぜひこの機会に手にとってみてください。

●展示場所

図書館２階 貸出・返却カウンター付近

●展示期間

2021年10月１日（金）～11月30日（火）

1年生のための図書館基礎知識～司書～

新 入 生：夏休みも明け、いよいよ後半戦。図書館に来る機会も増えたかな。外も涼しくなってきて、勉強や読書にはもってこいの季節ですね。

Ms.司書：そうだね。館内だけでなく、外へ出て自然を感じながらゆっくり読書を楽しむ・・なんて贅沢だよね。

新 入 生：ところで、図書館には「司書」と呼ばれる方がいらっしゃいますけど、どういったお仕事をされてるんですか？この前、館内で企画展示の準備もされていて・・少し気になったんですよね。

Ms.司書：興味があるの？なんかうれしいなぁ。司書っていうのは、1950年（昭和25年）に定められた図書館法に基づく国家資格なんだけど・・ちょっと堅いかな。図書館っていうのは、利用者の調査研究や教養の育成などを目的に設置されていて、その基となる図書資料などについて熟知している専門的職員・・ということになるかな。

新 入 生：正直に言うと、本の貸出や返却でお世話になるイメージしかないんですけど・・。

Ms.司書：一般的にはそういう印象かも。でも、図書館にある図書資料の管理だけでなく、目的に応じた資料の収集や提案、レファレンスと呼ばれる情報提供など、利用者と図書資料をつなぐ役割も担っていて、いろいろと相談にも乗ってくれるよ。

新 入 生：じゃあ、試験期間中なんか、お願いしたら予想問題やその答えを一緒に探してくれるかな？

Ms.司書：それは無理（笑）・・というか自分のためにならないよ。まあ、図書館で頑張って勉強すること。苦労は買ってでもと言うしね。

なからぎ 京都府立大学図書館報　235 号 2021 年 10 月発行　編集発行人：小林啓治
発行所：京都府立大学附属図書館　〒606－8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL：075（703）5128 ～ 5131
FAX 075（703）5192　ホームページ https://www2.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html